

Students'Cognition of the Sustainable Development Goals(SDGs)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村松, 陸雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/756

大学生による持続可能な開発目標(SDGs)に関する認知

Students' Cognition of the Sustainable Development Goals(SDGs)

村松陸雄^{*}
MURAMATSU Rikuo

はじめに

2015年9月、国連本部での「国連持続可能な開発サミット」において「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が全会一致で採択された。2030アジェンダは開発途上国の開発についての問題だけでなく、世界全体の経済、社会、環境の3側面（トリプル・ボトムライン）を、不可分のものとして調和させる統合的取組であり、先進国と開発途上国が共に取り組むべき国際社会の普遍性を原則とし、その中に持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals : SDGs）として17の目標と169のターゲットが示された（付図1、付表1）。

脆弱な立場におかれた人々を「誰一人取り残さない（Leave no one behind）」とのキーワードは2030アジェンダの根底に流れる基本的理念であり、自らが当事者として主体的に参加し、持続可能な社会の実現に貢献できるよう、あらゆるステークホルダーや当事者の参画を重視し、政府、企業、市民社会が全員参加型で行動することが要請されている。政府は、関係行政機関相互の緊密な連携を図り、総合的かつ効果的に推進するために、内閣総理大臣を本部長、内閣官房長官、外務大臣を副本部長、他の全ての国務大臣を本部員とした、持続可能な開発目標（SDGs）推進本部を内閣に設置した（2016年5月20日閣議決定）。SDGs推進本部は「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」を決定した。GRI（グローバル・レポートинг・イニシアティブ）、国連グローバル・コンパクト及びWBCSD（持続可能な発展のための世界経済人会議）は、「SDG Compass : SDGsの企業行動指針—SDGsを企業はどう活用するか—」を各企業の事業にSDGsがもたらす影響を解説するとともに、持続可能性を企業の戦略の中に据えるためのツールと知識を提供している（GRI, United Nations Global Compact and WBCSD, 2016）。

幅広いステークホルダー、特に国内外の若者におけるSDGsの認知度を向上させることを目的として、外務省はピコ太郎を「SDGs推進大使」に任命し、SDGs推進に係わる様々な広報・関連事業に起用している（外務省, 2017）。また、日本のお笑い業界大手の吉本興業株式会社と国連広報センター（UNIC）と協働で、笑いとエンタメが持つ敷居を下げる効果や人の気持ちをオープンにする力を活用し、「国連」、「開発目標」という言葉が含意する自分事から縁遠いイメージを払拭するための様々な広報活動を行っている（日刊工業新

* 工学部教授（環境システム学科）

聞, 2017)。

本論では、このような状況下で、大学生、特に専門分野が SDGs に関連が深い環境学関連学科に在籍する学生が SDGs をどのように認知しているのかを把握するために質問紙調査を実施し、その調査から得られた結果を報告する。

方法

実施時期 :

2017 年 7 月下旬 (環境システム学科 1 年生)、2017 年 10 月上旬 (「環境教育論」履修者)

調査対象者 :

東京都内の私立大学で環境システム学科に在籍する大学 1 年生 59 名 (男性 36 名、女性 23 名) と同学科の選択科目「環境教育論」を履修する 3 年生、4 年生の 56 名 (男性 26 名、女性 30 名)。

質問紙の内容 :

①SDGs に関する質問項目 (選択肢択一式)

「問 1-1 国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」という言葉を聞いたことがありますか?」
「問 1-2 国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」についてどのようなものか知っていますか?」

「問 1-3 国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」について、高校や大学の授業で受講したことありますか?」

②ESD (持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development) に関する質問項目 (選択肢択一式)

「問 2-1 「ESD (持続可能な開発のための教育)」という言葉を聞いたことがありますか?」
「問 2-2 「ESD (持続可能な開発のための教育)」についてどのようなものか知っていますか?」

「問 2-3 「ESD (持続可能な開発のための教育)」について、高校や大学の授業で受講したことありますか?」

③SDGs に関する重要度評価

「問 3 付表 1 は「持続可能な開発目標 (SDGs)」です。このうち、あなたが最も重要であると思う目標を 5 つ挙げてください。」※「環境教育論」履修者のみ実施

④SDGs と日常生活との関連を尋ねる質問項目 (自由記述)

「問 4 SDGs を達成するためにあなたの日常生活の中で何ができるか? 「具体的」かつ「自分の言葉」で論述せよ。」

⑤SDGs を達成することを妨げる障壁を尋ねる質問項目（自由記述）

「問 5-1 目標年である 2030 年までに SDGs を達成することを妨げる障壁は何か？」

「問 5-2 その障壁を乗り越えるためにはどうすれば良いか論述せよ。」

調査手続き：

質問紙調査法に基づき実施した。環境システム学科 1 年生に対しては、全専任教員がオムニバスで担当する必修授業「環境システム学入門」のうち、著者が担当する回（2 コマ連続授業<90 分間@1 コマ>）において、1 コマ目の冒頭に質問項目①②を含んだ質問紙の配布と授業時間内での回答を依頼し、1 コマ目終了時に記入済質問紙を回収した。2 コマ目に、著者による SDGs に関する講義と SDGs に関する映像教材（NHK クローズアップ現代+ No.3708「国連 70 年②"誰も置き去りにしない"世界を目指して」2015 年 9 月 29 日(火)放映）の視聴後に、質問項目④⑤を含んだ質問紙の配布と残りの授業時間内での回答を依頼し、2 コマ目の授業終了時に記入済質問紙を回収した。「環境教育論」履修者に対しては、著者が担当する環境システム学科 3 年次選択科目「環境教育論」の時間に、1 コマ目の冒頭に質問項目①②③を含んだ質問紙の配布と授業時間内での回答を依頼し、1 コマ目終了時に記入済質問紙を回収した。環境システム学科 1 年生と同様に、2 コマ目に、著者による SDGs に関する講義と SDGs に関する映像教材（NHK クローズアップ現代+ No.3708「国連 70 年②"誰も置き去りにしない"世界を目指して」2015 年 9 月 29 日(火)放映）の視聴後に、質問項目④⑤を含んだ質問紙の配布と残りの授業時間内での回答を依頼し、2 コマ目の授業終了時に記入済質問紙を回収した。

結果

表 1～3 に質問項目①の結果を示す。表 1 より、環境システム学科 1 年生の 54.2%、「環境教育論」履修者の 75.0%が SDGs という言葉を聞いたことがあり、環境システム学科 1 年生の 45.8%、「環境教育論」履修者の 25.0%が SDGs という言葉を聞いたことがなかった。表 2 より、SDGs に関する知識の程度について、環境システム学科 1 年生は、「(A) 知っている」が 1.7%、「(B) まあまあ知っている」が 18.6%、「(C) あまり知らない」が 37.3%、「(D) 知らない」が 42.4%であった。他方、「環境教育論」履修者は、「(A) 知っている」が 10.7%、「(B) まあまあ知っている」が 23.2%、「(C) あまり知らない」が 50.0%、「(D) 知らない」が 16.1%であった。表 3 より、環境システム学科 1 年生の 25.4%、「環境教育論」履修者の 60.7%が、SDGs について高校や大学の授業で受講したことがあり、環境システム学科 1 年生の 74.6%、「環境教育論」履修者の 39.3%が、SDGs について高校や大学の授業で受講したことかなかった。

表1 問1-1 国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」という言葉を聞いたことがありますか？

環境システム学科 1年生	度数	パーセント	「環境教育論」履修者	度数	パーセント
(A) ある	32	54.2	(A) ある	42	75.0
(B) ない	27	45.8	(B) ない	14	25.0
合計	59	100.0	合計	56	100.0

表2 問1-2 国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」についてどのようなものか知っていますか？

環境システム学科 1年生	度数	パーセント	「環境教育論」履修者	度数	パーセント
(A) 知っている	1	1.7	(A) 知っている	6	10.7
(B) まあまあ知っている	11	18.6	(B) まあまあ知っている	13	23.2
(C) あまり知らない	22	37.3	(C) あまり知らない	28	50.0
(D) 知らない	25	42.4	(D) 知らない	9	16.1
合計	59	100.0	合計	56	100.0

表3 問1-3 国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」について高校や大学の授業で受講したことがありますか？

環境システム学科 1年生	度数	パーセント	「環境教育論」履修者	度数	パーセント
(A) ある	15	25.4	(A) ある	34	60.7
(B) ない	44	74.6	(B) ない	22	39.3
合計	59	100.0	合計	56	100.0

表4～6に質問項目②の結果を示す。表4より、環境システム学科1年生の27.1%、「環境教育論」履修者の50.0%がESDという言葉を聞いたことがあり、環境システム学科1年生の72.9%、「環境教育論」履修者の50.0%がESDという言葉を聞いたことがなかった。表5より、ESDに関する知識の程度について、環境システム学科1年生は、「(A)知っている」が3.4%、「(B)まあまあ知っている」が8.5%、「(C)あまり知らない」が27.1%、「(D)知らない」が61.0%であった。他方、「環境教育論」履修者は、「(A)知っている」が5.4%、「(B)まあまあ知っている」が12.5%、「(C)あまり知らない」が42.9%、「(D)知らない」が39.3%であった。表6より、環境システム学科1年生の8.5%、「環境教育論」履修者の25.0%が、ESDについて高校や大学の授業で受講したことがあります、環境システム学科1年生の91.5%、「環境教育論」履修者の75.0%が、SDGsについて高校や大学の授業で受講したことがなかった。

表4 問2-1 「ESD(持続可能な開発のための教育)」という言葉を聞いたことがありますか？

環境システム学科 1年	度数	パーセント	「環境教育論」履修者	度数	パーセント
(A) ある	16	27.1	(A) ある	28	50.0
(B) ない	43	72.9	(B) ない	28	50.0
合計	59	100.0	合計	56	100.0

表5 問2-2 「ESD(持続可能な開発のための教育)」についてどのようなものか知っていますか?

環境システム学科 1年生	度数	パーセント	「環境教育論」履修者	度数	パーセント
(A) 知っている	2	3.4	(A) 知っている	3	5.4
(B) まあまあ知っている	5	8.5	(B) まあまあ知っている	7	12.5
(C) あまり知らない	16	27.1	(C) あまり知らない	24	42.9
(D) 知らない	36	61.0	(D) 知らない	22	39.3
合計	59	100.0	合計	56	100.0

表6 問2-3 「ESD(持続可能な開発のための教育)」について高校や大学の授業で受講したことがありますか?

環境システム学科 1年生	度数	パーセント	「環境教育論」履修者	度数	パーセント
(A) ある	5	8.5	(A) ある	14	25.0
(B) ない	54	91.5	(B) ない	42	75.0
合計	59	100.0	合計	56	100.0

表7、8に、問1-2と問2-2とのクロス集計の結果を示す。環境システム学科1年生と「環境教育論」履修者のいずれに関しても、ESDの認知度が高い人が、必ずしもSDGsの認知度が高いわけではないことが明らかになった。

表7 問1-2と問2-2とのクロス集計の結果（環境システム学科1年生）

問1-2国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」についてどのようなものか知っていますか？	問1-2国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」についてどのようなものか知っていますか？				合計
	(A) 知っている	(B) まあまあ知っている	(C) あまり知らない	(D) 知らない	
問2-2「ESD（持続可能な開発のための教育）」についてどのようなものか知っていますか？	(A) 知っている	1	1	0	2
	(B) まあまあ知っている	0	4	1	5
	(C) あまり知らない	0	2	12	16
	(D) 知らない	0	4	9	23
	合計	1	11	22	59

表8 問1-2と問2-2とのクロス集計の結果（「環境教育論」履修者）

問1-2国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」についてどのようなものか知っていますか？	問1-2国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」についてどのようなものか知っていますか？				合計
	(A) 知っている	(B) まあまあ知っている	(C) あまり知らない	(D) 知らない	
問2-2「ESD（持続可能な開発のための教育）」についてどのようなものか知っていますか？	(A) 知っている	3	0	0	3
	(B) まあまあ知っている	0	6	1	7
	(C) あまり知らない	2	7	12	24
	(D) 知らない	1	0	15	22
	合計	6	13	28	56

表 9 と表 10 に、質問項目③の SDGs に関する重要度評価の結果を示す。なお、今回の調査では、環境システム学科 1 年生に関して、質問項目③を除外したため、昨年度に別途調査した 2016 年度の環境システム学科 1 年生の結果を記載した。

表 9 より、環境システム学科 1 年生が、SDGs の 17 の目標のうち、重要であると評価した目標は、「目標 2：飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する」の 9.0%、目標 6：すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」の 11.5%、「目標 12：持続可能な生産消費形態を確保する」の 9.0%、「目標 15：陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する」の 10.4% であった。一方、重要でないと評価した目標は、「目標 5：ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワメントを行う」の 0.8%、「目標 11：包摂的で安全かつ強靭（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する」の 2.0%、「目標 17：持続可能な開発実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する」の 2.3% であることが明らかになった。

表 10 より、「環境教育論」履修者が、SDGs の 17 の目標のうち、重要であると評価した目標は、「目標 2：飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する」の 10.5%、「目標 6：すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」の 12.7%、「目標 12：持続可能な生産消費形態を確保する」の 9.1% であった。一方、重要でないと評価した目標は、「目標 9：強靭（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る」の 1.1%、「目標 11：包摂的で安全かつ強靭（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する」の 1.8% であることが明らかになった。

表 9 SDGs に関する重要度評価の結果（環境システム学科 1 年生<2016 年度>※）

	件数	%		件数	%
目標 1 あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる	25	7.0	目標 10 各国内及び各国間の不平等を是正する	23	6.5
目標 2 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する	32	9.0	目標 11 包摂的で安全かつ強靭（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する	7	2.0
目標 3 あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する	20	5.6	目標 12 持続可能な生産消費形態を確保する	32	9.0
目標 4 すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する	22	6.2	目標 13 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる	18	5.1
目標 5 ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワメントを行う	3	0.8	目標 14 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する	30	8.5
目標 6 すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する	41	11.5	目標 15 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する	37	10.4
目標 7 すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代エネルギーへのアクセスを確保する	26	7.3	目標 16 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効率的で説明責任のある包摂的な制度を構築する	10	2.8
目標 8 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する	12	3.4	目標 17 持続可能な開発実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する	8	2.3
目標 9 強靭（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る	9	2.5			

※今回の調査では、環境システム学科 1 年生に関して、質問項目③を除外したため、昨年度に別途調査した 2016 年度の環境システム学科 1 年生の結果を記載

表 10 SDGs に関する重要度評価の結果（「環境教育論」履修者）

	件数	%		件数	%
目標 1 あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる	21	7.6	目標 10 各国内及び各國間の不平等を是正する	19	6.9
目標 2 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する	29	10.5	目標 11 包括的で安全かつ強靭（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する	5	1.8
目標 3 あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する	14	5.1	目標 12 持続可能な生産消費形態を確保する	25	9.1
目標 4 すべての人々への包括的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する	17	6.2	目標 13 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる	13	4.7
目標 5 ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び児童のエンパワーメントを行う	13	4.7	目標 14 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する	20	7.3
目標 6 すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する	35	12.7	目標 15 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する	17	6.2
目標 7 すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する	14	5.1	目標 16 持続可能な開発のための平和で包括的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的に説明責任のある包括的な制度を構築する	10	3.6
目標 8 包括的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する	8	2.9	目標 17 持続可能な開発実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する	12	4.4
目標 9 強靭（レジリエント）なインフラ構築、包括的かつ持続可能な产业化の促進及びイノベーションの推進を図る	3	1.1			

表 11 に、質問項目④「SDGs と日常生活との関連を尋ねる質問項目（自由記述）」と⑤「SDGs を達成することを妨げる障壁を尋ねる質問項目（自由記述）」の結果を示す。なお、紙面の制約で、問 1-2 の SDGs に関する知識の程度について、「(A)知っている」と「(B)まあまあ知っている」の回答者のみを抜粋して記載した。

表11 管理項目④「SDGsと日常生活との関連を尋ねる質問項目」（自申記述）と⑤「SDGs達成することを妨げる障壁を尋ねる質問項目」（自申記述）の結果

回答者属性	問4 SDGsを達成するためにあなたが日常生活の中で何ができるか? [具体例]かつ自分の言葉で論述せよ。	問5-1 様様である2030年までにSDGsを達成するこ とを妨げる要は何か?	問5-2 様5-1の目標を乗り越えるためにはどうすればいいか論述せよ。
環境教育論_履修者1 女	水を節約して使う。植物的に野菜を育てる。無駄に物を買わない。世界を知りうるする。	2020年 東京オリンピック	今までのから本人の意図を明確で具体的な行動をみんなが理解しておくこと。そのためには、影響力のある学校や企業が取り組んでいくことが重要である。
環境教育論_履修者2 男	前向きとして、SDGsの目標をしっかりと理解できないない、まずはそぞぞその目標の特徴に身を染めることが重要で、その後に実現できる目標を考える。日常生活において努めなければならない事がある。	SDGsの目標を達成するためには、日々、環境的にこころを常に意識して生活することが重要ではない。必ずしも、目標自体ではなく、自分自身を通してみて、再生エネルギー、つまり再生エネルギーを活用していくことで地球を知ることが出来る。日本国内で始動している「地球温暖化」を起こさないために、再生エネルギーを活用していくことで、世界の問題を解決していくことが出来る。また、自分自身の人が資源をもつて、学び世界の人々とつなげあうことで「パートナーシップ」が活性化する事だ。	SDGsに取り組んでいる企業は活動しているが、目標達成にはまだ遠い。そのためには、国連が主に政府や組織に対して費用をかけて開催されるSDGsの会議に参加する事だ。
環境教育論_履修者3 男	環境教育論_履修者3 男	SDGsの目標を達成するためには、日々、環境的にこころを常に意識して生活することが重要ではない。必ずしも、目標自体ではなく、自分自身を通してみて、再生エネルギー、つまり再生エネルギーを活用していくことで地球を知ることが出来る。日本国内で始動している「地球温暖化」を起こさないために、再生エネルギーを活用していくことで、世界の問題を解決していくことが出来る。また、自分自身の人が資源をもつて、学び世界の人々とつなげあうことで「パートナーシップ」が活性化する事だ。	SDGsに取り組んでいる企業は活動しているが、目標達成にはまだ遠い。そのためには、国連が主に政府や組織に対して費用をかけて開催されるSDGsの会議に参加する事だ。
環境教育論_履修者4 女	環境教育論_履修者4 女	環境教育論_履修者4 女	環境教育論_履修者4 女
環境教育論_履修者5 女	環境教育論_履修者5 女	環境教育論_履修者5 女	環境教育論_履修者5 女
環境教育論_履修者6 男	環境教育論_履修者6 男	環境教育論_履修者6 男	環境教育論_履修者6 男
環境教育論_履修者7 女	環境教育論_履修者7 女	環境教育論_履修者7 女	環境教育論_履修者7 女
環境教育論_履修者8 男	環境教育論_履修者8 男	環境教育論_履修者8 男	環境教育論_履修者8 男
環境教育論_履修者9 女	環境教育論_履修者9 女	環境教育論_履修者9 女	環境教育論_履修者9 女
環境教育論_履修者10 女	環境教育論_履修者10 女	環境教育論_履修者10 女	環境教育論_履修者10 女
環境教育論_履修者11 女	環境教育論_履修者11 女	環境教育論_履修者11 女	環境教育論_履修者11 女
環境教育論_履修者12 女	環境教育論_履修者12 女	環境教育論_履修者12 女	環境教育論_履修者12 女
環境教育論_履修者13 女	環境教育論_履修者13 女	環境教育論_履修者13 女	環境教育論_履修者13 女
環境教育論_履修者14 女	環境教育論_履修者14 女	環境教育論_履修者14 女	環境教育論_履修者14 女
環境教育論_履修者15 男	環境教育論_履修者15 男	環境教育論_履修者15 男	環境教育論_履修者15 男

武藏野大学環境研究所紀要 No. 7 (2018)

※問1-2のSDGsに関する知識の程度について、「(A)知っている」と「(B)まあまあ知っている」の回答者のみを抜粋して記載

表11(続き)

考察

表 1、2 より、SDGs という言葉自体はどこかで聞いたことがあるが、肝心な SDGs の中身については、ほとんど知らないという実態が詳らかになった。2015 年に世の中に初めて登場してきた SDGs の知名度が、ここまで急速に向上したことは、ピコ太郎氏をはじめとする様々な関係各位のご尽力が功奏した成果であり、このこと自体は評価できる。ただ、これは、2030 年に SDGs を達成するための行程表の入り口にようやく立つことができたに過ぎない。2030 アジェンダに向けた取り組みを一層、加速させるためには、政府、企業、市民社会などのあらゆるステークホルダーが当事者としての関与を求められている。本論に関していえば、学生が SDGs を自分とは関係がない、遠く離れた世界の出来事ではなく、「自分事」として内面化し、内発的動機に基づき SDGs 実現に向けて行動をとることが期待されている。

表 11 より、「問 4 SDGs を達成するためにあなたの日常生活の中で何ができるか?」に対する回答として、「環境の持続可能性」(environmental sustainability)に関連した回答が多い傾向を読み取れる。環境関連学科に在籍する学生が自分の専門分野や強みを生かした貢献すること自体は全く否定すべきでないが、2030 アジェンダでは、SDGs のゴールとターゲットは統合され不可分であり、統合的解決の視点を持って取り組む必要がある。著者は高等教育機関に奉職する者の責務として、「今、何が日常生活の中で不安・不満があることをまとめて、17 目標のどれにあてはまるのかを考え、地元の役所が取り組んでいるもので解決策があるのかを調べる。なかった場合、家族や友達と意見を出し合って、解決策をみつけることができる。」(環境システム学科 1 年 12 女) が少数意見ではない、未来の“学びの場”を創出する知恵を出さなければならない。

表 9 より、環境システム学科 1 年生に関して、SDGs の 17 の目標のうち、「目標 5: ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワメントを行う」が重要であると評価する百分率は 0.8%、「目標 17: 持続可能な開発実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する」が重要であると評価する百分率は 2.3% と、いずれも 17 の目標の中で最低レベルの重要度評価の結果を示した。目標 5 と目標 17 は、Bertelsmann Stiftung (ベルテルスマントラスト財団), & Sustainable Development Solutions Network (2017) が「SDGs インデックス&ダッシュボード」で公表した、日本に関する SDGs 達成状況評価において、“赤信号”(達成度が最低ランク) と評価しており、改善を必要とされている。一方、「環境教育論」履修者に関して、同様な評価の結果として、目標 5 が 4.7%、目標 17 が 4.4% といずれも重要度評価の数値が大幅に向上している。この理由として、環境システム学科が育成する人材の方針は「持続可能な社会構築に向けて、環境科学の専門能力、幅広い環境関連分野の知識を身につけ、システム思考をもって主体的に社会参画し、社会を啓発する意欲を持っている人材を育成します。」という SDGs と親和性が高いものであり、この方針に基づいて学科科目が編成されていることから、既に学科科目を多数履修済の「環境教育論」履修者の結果が改善したと推測される。

総じて、環境システム学科 1 年生より、3 年生以上が履修している「環境教育論」履修者の方が、SDGs に対する認知度が高いことが明らかになった。この理由についても上述の SDGs 重要度評価と同様に、SDGs と親和性が高い学科ディプロマポリシーの教育効果によ

り、既に学科科目を多数履修済の「環境教育論」履修者の SDGs に対する認知度が高い結果となったと推測される。しかしながら、「環境教育論」履修者の SDGs に関する知識の程度（表 2）について、「(C) あまり知らない」 + 「(D) 知らない」の合計が 66.1%である現状には決して満足できるものではなく、環境系学科としてあるべき姿である、SDGs の主流化を実現するためのディプロマポリシーを早急に確立する必要があるといえるだろう。

ESD に関する知識の程度（表 5）について、「(C) あまり知らない」 + 「(D) 知らない」の合計が、環境システム学科 1 年生 : 88.1%、「環境教育論」履修者 : 82.2% と、いずれも認知度が著しく低い現状に驚愕している。「国連持続可能な開発のための教育の 10 年 (UN Decade of Education for Sustainable Development : ESD の 10 年)」が、2002 年のヨハネスブルグ・サミットにおいて、日本の NGO の発案をもとに日本政府と共同提案し、その後、先進国と途上国の双方を含む 47ヶ国が共同提案国となり、満場一致で採択された。このように国連における ESD 推進にわが国が主導的に関与した経緯から、2005 年に開始した「ESD の 10 年」に関連した新しい教育の試みが、様々なセクターによるパートナーシップのもと、日本各地で百花繚乱に展開し、ESD のコンセプトに基づく教育新時代の到来を感じさせる形で、2014 年の最終年を迎えたとの個人的な思いにも関わらず、著者が所属する環境教育学会でも ESD は再頻出語の一つに数えられるメジャーな言葉になっているにも関わらず、今回の調査の結果、ESD の認知度が極めて低いという想定外の知見に大変に驚かされたのである。

SDGs という言葉を閉じた専門家サークルのジャーゴン (Jargon) にとどめることなく、SDGs を旗頭に真のマルチステークホルダー・プロセスを推進して持続可能な社会を実現するためには、伝統的価値観に囚われたアカデミアに属する研究者のあり方（生き方）が厳しく問われている。著者は、これまでトリックスターと見なされてきた領域越境型研究者の萌芽的な可能性に注目し、別途、研究をすすめており、その報告は紙面を改めて行うつもりである。

最後に、本論の課題と今後の展望について述べる。本論は、首都圏に所在する 1 つの大学の環境関連学科の学生のみを対象とした質問紙調査の結果に基づく論考であり、今回、得られた結果を一般化することに課題があることは自明である。今後、他大学の環境関連学科の学生や環境学以外の専門分野を専攻する学生を対象とした追加調査を実施することは、学生の SDGs に対する認知をより精緻に理解する上で有益であろう。さらに、質問項目④「SDGs と日常生活との関連を尋ねる質問項目（自由記述）」と⑤「SDGs を達成することを妨げる障壁を尋ねる質問項目（自由記述）」に関して、回答された自由記述の内容を対象としたテキストマイニング手法を用いた質的研究アプローチにより in-depth な分析を進めている。これらの知見については、別の機会に報告することにしたい。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、環境学部 環境学科 4 年（当時）山田智彦氏によるご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表す。本研究は【武藏野大学学院特別研究費】により助成を受けて実施した。

引用文献

Bertelsmann Stiftung (ベルテルスマン財団), & Sustainable Development Solutions Network (2017).

SDG Index and Dashboards Report 2017—International spillovers in achieving the goals Global Responsibilities (Compact edition). Sustainable Development Solutions Network. Retrieved from <http://sdgindex.org/assets/files/2017/2017-SDG-Index-and-Dashboards-Report--compact.pdf> (October 31, 2017)

外務省 (2017). 岡本外務大臣政務官によるピコ太郎氏に対する「SDGs 推進大使」委嘱状交付 外務省 報道発表 平成 29 年 9 月 30 日 Retrieved from http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_005090.html (2017 年 10 月 31 日)

GRI, United Nations Global Compact, & WBCSD (2015). SDG Compass —The guide for business action on the SDGs—. Retrieved from https://sdgcompass.org/wp-content/uploads/2015/12/019104_SDG_Compass_Guide_2015.pdf (GRI &, United Nations Global Compact & WBCSD 国連グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン (GCNJ)・IGES (訳) (2016). SDG Compass : SDGs の企業行動指針—SDGs を企業はどう活用するか—. Retrieved from <http://pub.iges.or.jp/modules/envirolib/view.php?docid=6247> (2017 年 10 月 31 日)

持続可能な開発目標 (SDGs) 推進本部 (2016). 持続可能な開発目標 (SDGs) 実施指針 (平成 28 年 12 月 22 日決定) Retrieved from <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/dai2/siryou1.pdf> (2017 年 10 月 31 日)

日刊工業新聞 (2017). トピック吉本興業と国連が連携、なぜ? 国連広報センター・根本かおる所長に聞く、日刊工業新聞 2017 年 10 月 16 日朝刊



付図 1 持続可能な開発目標 (SDGs) のロゴ

出典：国際連合広報センター

付表1 持続可能な開発目標 (SDGs)

- 目標1 あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる
- 目標2 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する
- 目標3 あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
- 目標4 すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
- 目標5 ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワメントを行う
- 目標6 すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する
- 目標7 すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する
- 目標8 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する
- 目標9 強靭（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る
- 目標10 各国内及び各国間の不平等を是正する
- 目標11 包摂的で安全かつ強靭（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する
- 目標12 持続可能な生産消費形態を確保する
- 目標13 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる
- 目標14 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する
- 目標15 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する
- 目標16 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的に説明責任のある包摂的な制度を構築する
- 目標17 持続可能な開発実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する